活動報告

中学校 PTA 活動としての生理用ナプキン無料配布事業「若者応援スタイル」

橘那由美
環太平洋大学次世代教育学部 非常勤講師

1. はじめに

ここ数年、自治体などによる「生理用ナプキン無料配布」の取組が報じられてきており、徐々に広がりを見せている。

この動きのきっかけはコロナ禍のみではなく、複数ある。一般的には、いわゆる「生理の貧困」、つまりコロナ禍で収入が減少し生理用品の購入に窮するようになったため、として理解されがちである。しかし実は、2019年の消費税引き上げの際、生理用品が軽減税率対象とならなかったことへの疑義に端を発している[1)]。さらには、生理用品をめぐる諸外国の課税状況の変化まで注目されるようになり、社会問題の様相を呈してきた[2)]。

本稿では、2021年度から市立中学校PTA活動として開始し、現在も継続中である生理用ナプキン無料配布事業「若者応援スタイル」の概要を報告する。筆者の立ち位置は、事業開始年度のPTA会長である。なお、公立中学校PTAであることを勘案して、本文中ではX中学校PTAと表記する。

2.「若者応援スタイル」事業のあらまし

（1）X中学校の概要

X中学校は3小学校区から成り、生徒数約800名で市内随一の規模である。市内のほぼ中心部に位置し、旧市街地と新興住宅地とが隣接するエリアで、約半数の生徒が自転車で通学している。学区内には、国道、旧道、鉄道があり、市内では比較的交通量の多いエリアでもある。

（2）X中学校PTAの概要

X中学校PTAは、2021年度はウィズコロナ時代の、新たなPTA活動を模索する運びとなった。これには本部役員11名のうち7名が小学校でPTA本部役員を経験しており、うち筆者を含む2名が会長経験者かつ市PTA連絡協議会（以下 市P連）役員であったことが奏功している。役員の内訳は男性4名女性7名であり、筆者は初の女性会長である。

2021年度の活動スローガンを「今こそ 大人も子どもも新たなチャレンジ～できることから一つずつ～」と掲げた。コロナ禍であれ子どもたちの中学生の時期は一度きりであり、目覚ましい成長期、多感な思春期、かけがえのない貴重な三年間

であることに変わりはないとの認識から、①子どもたちの学校内外での生活を直接的に支援する活動、および②大人たちが模索する背中を見せることで子どもたちを間接的に応援する活動、の両方をイメージした。まずは大人たちが、できること・できそうなことから一つずつ、新たにチャレンジをしよう、との思いを役員間で共有した。

図１は2021年度のPTA各事業をイメージしたものである。6月から7月にかけて、「危険箇所マップ作成～４校協働プロジェクト～」と題して、中学校区内の３小学校PTAと協働して、保護者および教職員約2600名を対象に危険箇所の情報提供を呼びかけ、独自アプリを駆使して得られた情報を共有した。ICTを活用して、PTA本部のリモート役員会[3]や、Web講演会[4]を実施し、旧来の活動方法からの方向転換も試みた。

明けて１月中旬には生徒会役員とPTA役員との座談会を開催した。感染拡大の合間を縫って、かつ生徒会役員選挙の直後の時期は避けて、放課後１時間という設定で校長室にて場を設けた。生徒会役員５名、教諭２名、PTA役員５名が参加し、勉強、部活、趣味、学校行事、校則など話題に事欠くことなく和やかなひとときを過ごした。参加した保護者からの感想は「こんなご時世に、よそのお子さんとお話できてよかったです」「なんとも清々しい気持ちになりました」などと好評であり、役員が、「PTAとして何ができるか」をあらためて考えるきっかけとなった。

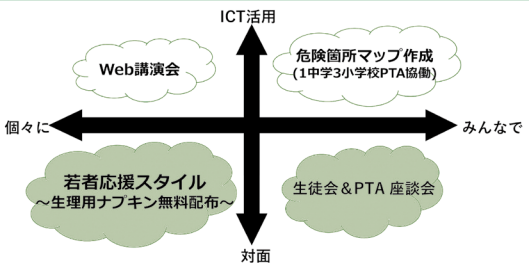

図１　PTA各事業のイメージ（筆者作成）

（3）構想から事業開始まで

座談会の翌々日、参加した保護者（以下 提案者）から筆者に、「市内、せめてＸ中学校区内の小中学校に生理用ナプキンを置けないか。生理の貧困ももちろん突然の生理やナプキンを忘れた時にトイレにあれば恥ずかしい思いをしなくて済むのでは」と相談があった。これを受け事業開始に向けまずPTA役員間で、また学校長はじめ教頭、養護教諭、PTA担当教諭とも合意形成したうえで、急遽年度内の事業開始をめざすことになった。この段階で、座談会に出席した保護者の一人が助産師であることが判明し、PTA役員というより医療従事者としてスーパーバイズすることになった。そして、中学校の卒業式１か月前である２月中旬を目標に事業を立ち上げていくことが決まった。

資料１は、保護者向けの配布文書の抜粋である。保護者の理解を求める目的で、文書分類を（お願い）とし、校内で黒インク印刷した。文中下から３行目「別紙リーフレット」（図２）は、カラー光沢紙印刷を外注し、関連性の高いホームページのURLを３サイト紹介した。ラミネート加工したトイレ掲示物（図３）を添えて実際に設置したのが写真１である。

（4）事業開始から卒業式まで

事業は概して好評であったが、どうしても「間もなく卒業する３年生にとっては、還元性の少なさが否めない」との思いが拭えず、卒業式前日に卒業祝いとして３年生にのみ、帰り学活で趣旨説明の後、昇降口でPTA役員が生理用ナプキン（夜

資料１　PTA 会員（保護者）向け配布文書（抜粋・一部加工）　　（筆者作成）

若者応援スタイル－生理用ナプキン無料配布事業－について（お願い）

立春の候、平素はPTA活動にご協力をいただき、厚く御礼申し上げます。
表題の件について、驚かれた保護者も多いかと存じますので、項目に沿ってご説明いたします。

【経緯】
今年度PTA本部役員は、コロナ禍の中、役員会や研修会、生徒会との座談会を通じて、LGBTQや貧困、SDGsといった課題を知るにつれて「PTAとして何ができるか」を考えてまいりました。SDGsが掲げる17項目のうち、とりわけ「5．ジェンダー平等を実現しよう（ジェンダーの平等を達成し、すべての女性と女児のエンパワーメントを図る）」「1．貧困をなくそう（あらゆる場所で、あらゆる形態の貧困に終止符を打つ）」は、PTA活動としての意義を見出しやすく、また、多感な思春期のまっただ中である中学生に対して効力が発揮できる項目でもあります。そこで、かねてからニーズがあった生理用ナプキンの無料配布について、先生方と協議を重ねたうえで、「若者応援スタイル」と銘打ち、X中学校PTAの活動として実施する運びとなりました。

【本事業の目標・目的】
月経期間中の不快感を少しでも和らげて学校生活がより楽しめるよう、校内どこでも生理用ナプキンをすぐに使えるよう各トイレに設置します。これにより、月経が急に始まったり、教室移動が続いたりといった場合でも心配しなくて済みます。この活動は、単に女子生徒にのみ還元性があるのではなく、学校全体の活性化にもつながることが期待されます。
　X中学校PTAは市内随一の規模ゆえ、それ相応の影響力ならびに発信力を持ちます。生理用ナプキン配布は、巷間で昨年頃から報じられてきておりますが、この地域での他に先駆けての実施とあれば、生徒たちにとっても、保護者の皆様方や先生方にとっても誇らしいことでもあると考えております。あと１か月で巣立つ３年生にとっても誇らしいことであるはずです。このような理由から、年度末の時期に慌ただしく実施する運びとなりましたが、併せてご理解くださいますようお願いいたします。

【PTAの活動趣旨および会費使途】
保護者の方々におかれましては、お子さまの学年、性別、人数によって不公平感を抱く方がおられるのは承知しております。しかし、そもそもPTAとは、社会教育法第10条に根拠のある社会教育関係団体の一種であり、活動趣旨は「みんなでみんなに」を基本とするボランティア団体です。その会費使途は個々人への利益還元に限定されるわけではありません。
なお本年度は、県PTA連絡協議会「親育ち支援事業」に申請し、採択済みです。本事業には、皆様からお預かりしているPTA会費に加え、この助成金も充てます旨、お知らせいたします。

この活動が、今まで見過ごされてきた不合理についての問題提起となり、女性だけが不便な思いをする理不尽さについて、まずは大人が気づくきっかけとなれば幸いです。ぜひ、別紙リーフレットもご一読のうえ、紙面でご紹介しておりますサイトもご参照ください。
まだまだ寒さ厳しき折、皆々様におかれましては、どうぞいっそうご自愛くださいますようお願い申し上げます。

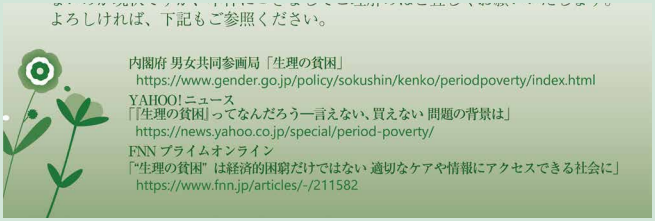

図２　生徒・保護者・教職員用カラーリーフレット（抜粋）（筆者作成）

写真１　３年生用トイレの設置状況（筆者撮影）

図３　トイレ掲示用ポスター（パターンⅡ）（筆者作成）

写真２　卒業式前日の配布状況（生徒撮影）

用１パック）またはウエットティシュ（１パック）を配布することにした。この配布は「母校にて先駆的な取組が始まったことを誇りとしてＸ中学校を巣立ってほしい」との思いも込めて実施した。

写真２に示すように保護者役員５名が配布を行なった。ウエットティシュを希望する女子もいれば、「母に持って帰ってもいいですか」とたずねて生理用ナプキンを持ち帰る男子もいた。この取組は地域紙で取り上げられ、地元からの反響も大きかった。

卒業式当日は保護者から役員に対して多くの声が寄せられた。実は３年生は受験のストレスからか生理周期が乱れ、卒業前１か月という短期間ながら、相応の需要があり、それなりの還元性が生じていたことも判明した。

この時期はＸ中学校PTA広報紙で事業概要を紹介したのをはじめ、市Ｐ連の広報紙でも年度の取組（図１参照）を見開きで大きく紹介する機会が得られ、配布時には、他校の中学生が「Ｘ中、ええなあ」とつぶやいた例も報告されている。

地域紙の発行に先回りする形で、市Ｐ連経由で市内の小中学校あてに、以下の３種を発送した。事業開始時の保護者向け説明文書（資料１）、事業概要のカラー光沢紙リーフレット（図２）、３年生への配布時の保護者向け説明文書である。学校長からも校長会のメーリングリストで文書配布の旨、連絡がなされた。この頃、筆者のもとには事業に対する称賛の声も多く届いていたが、中には学校に対する要望も数件寄せられた。主訴としては、「主に小学校で、多くは運動会練習時など日程が立て込んでいる際に、ナプキン交換の機会が児童には無く、経血が下着に漏れたまま活動を続けるほかなく帰宅して泣いたが、担任や学校には言いにくい」との内容である。実はＸ中学校PTA

役員の中にも、我が子が同様の経験をしている人物がおり、筆者の耳に入ったのが、同一例ではないかと推察できるほど状況が酷似していた。

他の意見も含めて寄せられた声を筆者がまとめ、市P連経由で市教育委員会学校教育課に改善をお願いする文書を提出した。

一方で筆者は、PTA会長として中学校教員と接する中では、月経をタブー視する雰囲気も全くなく、また、生理周期等についても一定の知識理解がある様子が十分に伺えた。

(5) 事業開始翌年度から現在まで

市P連から依頼があり、役員交代後であることを承知の上、4月になってから、2021年度PTA会長、提案者、教頭の3名で、2022年度市P連定期総会にて事例報告を行なった。

5月には、前述の改善要請を受けて、市教委の養護教諭部会で内容が周知された。8月開催の市人権教育研究大会（以下 市人教）では、X中学校PTA「生理用ナプキン無料配布事業～若者応援スタイル～」の概要を5枚のパネルにまとめて提示する機会を得た。

しかし、翌2023年1月の市P連イベントでも、8月の市人教同様パネル展示をしたところ、「X中学校だけでなく、この取組を広めてほしい、小学校の先生にも生理について少しでも知ってもらうことはできないのか」「X中学校だけでなく、せめて市内のほかの学校の児童も恩恵を受けられたらいいのに」「現実的には、ナプキンの無料配布より、特に小学校でナプキン交換の機会を確保してほしい」といった声が、閲覧保護者から寄せられた。筆者が市P連として、市教委の協力を得て、市内の各校にも周知を図っている旨を説明するも「とくに高学年の担任の先生たちには、届いていないのでは」という辛辣な声が返ってきた。

2022年度は、X中学校PTAに続いて市内で同様事業を実施したのは小学校PTA1団体のみであったが、2023年度は小学校PTAが4団体、中学校PTAが1団体、と徐々に広がりをみせている。

2023年8月の市人教では、生理用ナプキン無料配布事業についての事例報告を依頼され、学校関係者や各種団体関係者が参集する中、事業概要に加えて、この活動を通じて筆者のもとに寄せられた声についてもつぶさに報告した。「運動場で3分間のトイレ休憩があったとして、最寄りのトイレで用を足すことはできても、教室に生理用ナプキンを取りに行き、トイレで交換して、また運動場に集合するのは不可能ではないでしょうか。月経について一定の知識理解の必要性を痛感します」と結んだ。市内の学校長らが出席する中で、ここまで言及したからには事態の好転を願うばかりである。

3. 総括

本報告において、活動を円滑に進められた要因を以下に示す。

まず1点目は、教職員の全面的な理解と協力が得られた点である。学校長は、序盤から全面的に理解を示してくれていたが、教頭2名のうち1名が女性であったため、PTA役員の前で実務をこの教頭に全権委任して、実働性のある実行委員会が立ち上がった。教頭は「座談会のあと、PTAの人たちが、こんなこと考えてくれているみたいやけど、どう？」と生徒会役員にフランクに訊いてまわり、特に体育館や特別教室近くのトイレに強い

表１．生理用ナプキン配布事業開始までの流れ　（筆者作成）

時期	教職員	生徒	保護者（PTA役員を含む）
1/11	座談会	座談会	座談会
1/13			事業提案
1/13 ～21	合意形成 （校務運営委員会）		合意形成 （PTA役員会）
1/24	ニーズのヒアリング （教頭→→	ニーズのヒアリング →→生徒会役員）	
1/25	実行委員会立ち上げ （教頭、養護教諭、 PTA担当教諭）		実行委員会立ち上げ （PTA会長、役員（提案者）、 役員（助産師））
1/25	設置場所の検討・説明		設置場所の確認 物品購入（生理用品、カゴ）
1/26			事業名を「若者応援スタイル」 に決定
…	文書確認		文書作成（配布用、掲示用）
2/9	職員会議にて概要説明 （教頭→教職員全員）		
2/10	帰りの会にて概要説明 （学級担任→→	帰りの会にて概要説明 →→全校生徒（各クラス）	文書２種配布 （カラーリーフレットを含む）
2/14	物品設置（生理用品、カゴ）	使用開始	

ニーズがあるなど具体的な生徒の要望を集約してくれた。またトイレ個室への設置が難しいながらも、個室奥にちょうど机１台が置けるスペースを活用する案を提示するなど、このような知己を得た言動の積み重ねにより、早期の事業開始が実現した。校内でのトイレへの補充には保護者は関与せず、この旨を配布文書に明記することも早々に実行委員会で決定した。物品購入と校内への搬入までを保護者が行い、それから先は、学校に任せるという流れである。

２点目は、学校として、女子生徒のみにではなく全校生徒を対象として事業説明すると決断した点である。当初は、体育の時間を活用して女子生徒のみに事業概要を説明する流れに実行委員会で決まりかけた。しかし実行委員会の途中で、男女別での体育実施は３年生の12月までであり、発案の時点ではもう３年生は男女別ではなく種目別で体育の授業を受けていることに教頭が気づいた。そこで発想を転換し、「それならば女子だけにコソコソと説明するのをやめて、思い切って、帰りの会で全校生徒に説明すればよいのではないか」という結論に達した。この決定を受けて、具体的な説明者として、学校長や養護教諭やPTA会長が、オンデマンドやリモートで説明する案も浮上したが、最終的には各担任がそれぞれのキャラクターを活かして、明るく、サラッと、タブー視せずに全校生徒に伝えることに決まった。保護者および生徒向け文書配布日の前日、教職員にむけ

て教頭が趣旨を説明し、養護教諭やPTA担当教諭も質疑に応答した。

3点目は、新たなPTAの模索を通じて、保護者役員のなかに活動への効力感が共有できていた点である。先述の「4校協働危険箇所マップ作成事業」では、地域紙の取材もあり、また大学生ボランティアがデータ収集に協力してくれ、警察の巡回が強化されるといった好循環もあった。県PTA連絡協議会発行の広報紙で全県に紹介され、市内はもとより他市PTAからも問い合わせがあり、コロナ禍ながらも実効性のあるPTA活動ができていたことで、新事業の発案に対して、保護者役員が前向きに取り組める雰囲気が醸成できていたと考えられる。

以上3点が、本事例の特徴であり、同種活動実現のヒントと成り得る知見とも言えよう。

4. おわりに

生理用ナプキン無料配布事業そのものは好評で、PTA役員交代後も順調に活動できているが、活動を通じて、市内随所とくに小学校で生理用ナプキン交換の機会が確保できていない状況が露呈した。事業開始時に配布した説明文書には「今まで見過ごされてきた不合理についての問題提起」と綴っているので、これは市P連役員として、あるいは微力ながらも活動に通底するテーマに長年向き合ってきた筆者が率先して今後も改善に取り組むべき課題であろう。

カラーリーフレットには、「『月経』という性のいとなみを社会全体で肯定しましょう」「性別問わずひとりひとりの自己肯定感を高めお互いを尊重しましょう」と記した。本活動が、よりよい社会への一助となることを切望する。

註

1) 山口暢彦（2019）「『生理用品』『おむつ』も軽減税率？　現場対応できず困惑も」，産経ニュース，https://www.sankei.com/article/20190826-TFD2BNNNOZNQFF2JHX7UQ4IKJY/（2024/01/03最終確認）
2) NHK（2021）「クローズアップ現代2021年4月6日（火）放送　生理の貧困社会を動かす女性たち」，https://www.nhk.or.jp/gendai/articles/4530/index.html（2024/01/03 最 終確認）
3) 実際には、対面参加とリモート参加のハイブリッド方式であった。
4) 体育館での講演会を変更しWeb配信したのではなく、初めからWeb配信のみを想定した。内容は「臨床心理士からの思春期子育てアドバイス」および「親子で学ぶ防災・減災～X中ブロック4校協働プロジェクトの一環として～」の2本立てであった。